



ST 転生 即奴隷 墮

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

来宮悠里

イラスト/tatapopo

TS 轉生即奴隸墮

どうしてこうなった。

薄暗い石畳の様な床材の設けられた、クッションの役目を果たしていないベッドの上で、黒髪の少女はそう思った。

少女が目線を動かした先にあるのは、鉄格子で出来た扉。彼女のイメージの中にある牢屋そのものと言った場所に一人ぼつんと入れられていた。

「どうしてオレがこんな目に」

そう呟くしかない。

微臭さや汚れといった物は全く無いが、それでもこの日の光が届かない風景は心にくる物がある。

「ただ、こっちの世界に無理矢理転生させられたってだけなのに……」

膝を抱き体を丸め、少女はこの世界に來た始まりの記憶を思い起こす。

どこかで何か話をしたような記憶はあるのだが、それは殆ど覚えておらず。記憶の片隅にあるのは、自分の元々の本名と、自分が死んだ記憶と、そして、自分の新しい名前だった。

五条翔馬。それが元々生きていたときの彼女の名前だったが、こちらの世界ではソーマという名前を与えられた。

「……ああ、んう？」

ぼかぼかと陽気な陽射しを艶やかな黒髪と目鼻立ちの整った顔に受け、微睡みから目覚めたソーマはうすらぼんやりとしつつも少しずつ思考を加速させていく。

そよ風が頬を撫で、陽射しの明るさに瞼を開ける。ソーマの目には底抜けに広がる青空だけが映っていた。

「あー……えー……」

目を擦りながら、体を起こす。

すると胸の辺りがゆさりと大きく揺れた。

視線を落とすと、服の上からでもよくわかる胸の膨らみが股を見えなくしていた。

「そーいや……」

なんかよく分からないが、男としては生きられないから女にされたんだったなあと、寝ぼけた頭でソーマは理解した。

「ここどこだ……いや、確かあっちの方に行けば街だっけ。なんだこれ、聞き慣れない声もだけど、誰かに聞いた記憶がない記憶があるの、目茶苦茶きもちわりい……」

ソーマは頭を振りながら、意識をしっかり持とうとする。その度に髪がばっさばっさと揺れ、同じように主張の激しい胸も大きく揺れる。

胸が重い。そう思った。

「おっぱい重すぎだろ……なんだよこれ、クッソ邪魔じゃん……揺れるといてえし」

質のいい衣服を着ていることに気付いた物の、胸を支える物が最低限の質でしか無いため、補正と言うよりも形を整える程度の物でしか無かった。

「はあ……まあいいや、行くか」

ゆっくりと立ち上がって、大きく伸びをする。

見た事も無い景色、抜けるような青空と、緑豊かな丘陵地帯。現代日本では観光スポットにでも行かなければ見ることが出来ないような景色が、ソーマの目の前に広がっていた。

「すっげーなあ！」

見目麗しい姿を感嘆の表情に崩して、ソーマは陳腐な感想を漏らした。陳腐な感想しか出ないほどに、言葉を失っていたのだ。

「はあ……まあ、こういう景色が見れるなら、死んだのも悪くはなかったか……？」

腰に手を当て、目の届く範囲に広がる緑と空の青のコントラストを楽しみながら、記憶にある街の方へと歩き出した。

それから数十分ほど歩いた。丘陵地帯を抜け、森の中に一本の街道が貫かれている道に差し掛かった。

その入り口には人影がある。武装した髭面の男だ。異世界に来て始めて見る人。

「おいおい、嬢ちゃんよ、ここを通りたかったら金を払え」

「はあ……？」

「なんだあ？ しらねえのか、ここは俺達の縄張りだぜ、通りたかったら金を払うのが筋だろ。それとも、森の中を進むか？ 丸腰なら魔物に食われて速攻で死ぬぜ」

下卑た笑みを浮かべながら髭面の男はソーマに魔物の存在を示唆して来た。

それにソーマは考える。

金は持っていない、かといって魔物と戦って生き延びられる保証もない。その前に戦い方すら知らない。強行突破は不可能だ。

（あれ、これ詰んでね……）

瞬間的に察した。現状を打破する術は何もない。

「オレ、金持っていないんだけど」

バッグの一つも無く、着の身着のままの姿であるソーマは正直にそう言うしかなかった。

「じゃあ、魔物の餌にでもなるんだなあ！ 見たところ武器の一つも持っていないようだしな」
ゲラゲラと笑いながら、好きな方の森を選んで言わんばかりに目の前の髭面の男は指差す。

「それとも、その体で払うか？ 売ればいい金になるだろうさ！」

体、自分を指差されてソーマは身構える。

顔はどうかはしらないが、確かに自分でもいい体つきはしていると思う。

「女神信仰の強いやつに売れば、お前のその姿は随分と高値がつきそうだ」

「……はあ？」

「なんだお前、もしかして来訪者か。この世界でお前のような姿を見たら、崇める人間の方が多いつてのに、罪な奴だねえ」

ソーマのコイツは何を言っているんだという態度に、髭面の男は、肩を大きく竦めて見せる。

「まあ、教えても詮ないことだ。金も無い、戦う術も無い。なら、大人しく売られときな」

髭面の男がソーマに手を伸ばす。

しかし、ソーマの本能が捕まったら拙いと認識し、反射的に回避行動にでた。

（体重た……。思ったように動けねえ……）

歩く分には問題は何もなかったが、変化した身体が、ソーマの意識よりも数瞬遅れて動く。

「ああん？」

案の定眉根を寄せて、怒りを露わにしてくる髭面の男。躍起になって、伸びてくる手を何とか避ける。しかし、後ろ歩きの様相で避け続けていると、背中に何か硬い物がぶつかった。

「はっ、手を煩わせやがって。まあいい、大体なんで俺があそこで待ち伏せ出来たのかなんていう理由に思い至って無いのが滑稽だぜ」

ソーマの背中にあたる硬い何かが、ソーマの肩をむんずとつかんだ。

「えっ……？」

恐る恐る顔を後ろに向けると、そこには数人の男共がいた。その中の一人がソーマの肩をがっしりとかんでる。

「アニキイ、まーた、遊びましたねー？」

「いいじゃねえか、お陰でいい獲物見つけただろ」

絶望しかここにはなかった。

避けられるのも計算通り、そして追い込み逃げられないようにする。

「ほらみる、いい顔になったぞ」

ソーマの顔を覗き込みながら、髭面の男はゲタゲタと大笑いを始めた。

大きく見開いたソーマの目は恐怖に歪み、唇を戦慄かせている。

「そつすね、それでどうするんすか」

「ああ、まあ、まずはいつものように、な」

「へい！」

言うが否や、ソーマを掴んでいた男が力任せに組み伏せる。

「あぐっ！？」

口の中に広がる土の味を感じたところで、自分の身に何が起こったのかに気付くソーマだったが、圧倒的な力の差に為す術もなかった。

「何を、しやがる！」

砂礫で頬を荒く擦りながら、ソーマは恐怖から一瞬にして沸騰した怒りによって組み伏せた男を睨みあげる。

しかし、その目付きは男共には可愛い物だったようで、嘲笑と共に仰向けにされてしまった。

「何って、ナニだよ。お前を売るんだ。もし遊べるようなら一発でも遊んどくつてのが筋だろ。そんなナリの上物の女なんて早々いねえからなあ」

「いいっすねえ……まさかここまでソールテリアとそつくりな女がいるなんて思いませんでしたよ……うへ、うへ……」

「はっ、お前の信奉はソールテリアだったから……まあでもまずは……おい、暴れられても面倒だ、押さえつけろ！」

ソーマを追い詰めた、髭面の男は周囲にいる奴らに指示をだす。

その指示を聞き、周囲の男共は機敏に動き出す。腕を押さえつけ、足を持ち上げ固定し股間を嫌と言うほど強調させる格好にする。

「は、はあ……はあ……今までのどの女より触り心地のいい太股だぜ……」

「ひいッ！ やめる気持ち悪い！」

ソーマの右足を持ち上げている男が、肌の質を愉しむようになで上げ、それにソーマが悲鳴を上げ暴れる。

「いずれの商品を傷物に出来ないから手荒なことは出来ないが……、まあそれくらい愉しむのはいいよなあ」

でもまあと、髭面の男は一呼吸を置いて、ソーマを指し示す。

「煩いのはかなわん。音を奪え」

力ある言葉が指先に光となつて灯り、その光がソーマの喉を貫いた。

あれだけ煩く上がっていたソーマの悲鳴がピタリと止んだ。

「——ッ！ ————！！！」

何かを訴えるかのようにソーマの口元がばくばくと動くが、その口から声が漏れる事は無かった。

何をされたのか分からなかったが、転生前の知識でソーマは沈黙の魔法をかけられたのだと当たりをつける。

（クソッ……本当に異世界かよ……！！）

恐怖に襲われたことで、やっとソーマは自分を襲った人間の格好に気を配る。

髭面の男は、腰に剣を帯び、随分と使い込まれ薄汚れた何かの皮を鞣した胸当てをつけている。かたや自分はどうだ？

来ている衣服は上等な品物ではあるが、それ以上何もない。何の防御力も無い。

組み伏され、押さえつけられ、声を奪われた。後はなるようにしかならない。絶望よりも諦めた。

自分の事を売ると言っていた事を聞き逃していなかったソーマは、死ぬ事よりも先の事を考える事にした。まだ生きていられる。どうにかこうにかして生を繋ぐ事が出来る。生まれ変わってすぐ死ぬわけではないと言うことを理解した。

「お、大人しくなったな。そっちの方が手間が省けていい」

髭面の男は、ソーマを見下ろしながら無理矢理浮かされたソーマの臀部に手を掛ける。

スカートは捲れてしまい、飾り気のない女性物の下着が惜しげも無く晒されている。

男はソーマの下着に手をかけ、股布を思い切り横にずらす。

こちらで生を受け、未だにソーマ自身すらも見た事のない女のソレが露わになる。女性として成熟した秘裂が外気に晒される。

（何だこれ……、クソッ！）

自身の心は男であると、ソーマは認識している。だが、もたらされる羞恥心が自分の心とは裏腹に頬を赤く染め上げ、嫌悪に眉根が寄る。

辱めを噛み殺す。自分の中の語彙から溢れるありつたけの罵倒を心の中で唱える。

閉じた秘裂に男の節くれだった太い指が這う。

「使い込んだ節はみえねえなあ、まあ、ご開帳と行きますか」

髭面の男は値踏みをするように声をあげ、ソーマの秘裂を開いた。

綺麗なまでの肉々しい色合いが露わになった。

皮を被った陰核、まだ、一回たりとも使われた形跡のない膜の見える穴。女としての機能を備えた未使用の穴が、白日の下にさらされる。

「チッ……処女か。ただの金蔓だ、つまらん」



「ええ……そんなあ……」

髭面の男の落胆の声に、ソーマを拘束していた男達も一様に落胆の声をあげる。

「ちつとでも遊んでれば良かったんだがなあ……。まあ、お前さんは良かったな。輪姦されなくて。処女であつたことを喜べ、ケッ」

髭面の男の悪態が地に落ち、拘束が緩む。

ソーマはもう逃げる気力は無くなつていた。

生きる事を諦めたわけではないが、この辱めに気力を消耗していたのだった。

「ああん？　もう大人しくなつたのかよ、つまんねえな。おい、そろそろ喋れるようになるから、身動き取れないようにしとけ」

言葉を奪われたまま、ソーマは目隠しをされ猿轡を嚙まされた。そして、急激な眠気に襲われそのまゝ意識を失つた。

そして、目が覚めたらここにいた。

ソーマのイメージの中にある牢屋と思われる場所。衣服はボロに着せ替えられ、下着すら着けていない。そして、右腕にはゴツい腕輪がいつの間にかはめられていた。

部屋にはソーマが眠っていたベッドの対面にもう一台あり、それのお陰でこの部屋が相部屋であるという事がすぐ様理解出来た。

灯りは適度な明るさで、壁に掛けられた蠟燭の炎が室内を照らしていた。

辺りを観察していると、不意に扉が開いた。

「あら、起きたの」

体を起こしているソーマに扉から声が降りかかる。そちらの方へ顔を向けると、赤髪の背の高い女がこの部屋に入ってくるところだった。歳はそう若くないように見える。

「あー……」

こくりと頷いて返す。

服装はソーマと同じようにボロを纏っている。

「そ、貴方も災難ね。私はクリーム。貴方は？ ああ、お水飲む？」

手に持っている水差しをひらひらとさせながら、クリームと名乗った女は、場所の雰囲気になじめない清潔そうなグラスに水を注いでいく。

「貰えます、か」

「はい」

一杯入ったグラスを受け取ったソーマは、一気に煽る。無味無臭、軟水のような舌触りの水だ。

異世界に来て初めて口にしたのが水だなんて、笑えてくる。しかも場所は牢屋のような所で、同じような衣服を着た女から貰ったものとか。

「貴方、いい所のお嬢さんだったのね……。こんなところで出される物を警戒無く飲むなんて」

「いや……あー、うん……確かに、警戒心が足らなかった。でもあんたが飲むために汲んできたんだと思うたから」

「あ、そ。ちゃんと考えて受け取ったのなら問題は無いわね。それで貴方の名前は？」

「ソーマ。そう名乗るように言われた」

「驚いた。見た目もだけど、名前も似てるのね」

「似てるって」

目を少しだけ見開いたクリームに、ソーマは顔を上げて疑問を投げる。

「黒髪にその美しい容姿、それとソーマって言う名前。つい先日、世界を救ってくださった、女神ソール

テリア様にそっくりよ」

宗教かと、ソーマは考えた。

しかしそれにしても、随分と世紀末な世界だ。女神が世界を救うなどと。

「見た事あるのよ、私。ソールテリア様に加護を授かった聖騎士様一行とソールテリア様が旅に出ているのを」

見た感じから受ける年齢よりも随分と乙女じみた台詞を吐くクリム。

それにソーマは何を答えるでもなく、ただ話を聞き流した。他愛のない、女神と聖騎士一行の冒険譚だ。きつと巷では随分と話をされているのだろう。そのお陰で、少しばかりこの世界の知識も付いた。無いよりマシ程度だが、常識的な所は情報として得られた。

「……なんか、私ばかり話してゴメンね？」

「いいよ、オレ、この世界の事も知らないし」

ぼつりと出た一言にクリムが食いついた。

「もしかして、来訪者？」

「なにそれ」

「異世界から来た人、この世界のバランスを保つ三柱のうちの一片、命と流転の女神ノンシエラ様に選ばれた人」

「……かも知れない。気付いたらここにいた。前の世界の記憶はあるけど、こっちに来る瞬間の事は殆ど覚えて無い。それこそ名前だけ、かな」

ソーマという名前と、前世で男だったという事、そして平凡な日本人であったこと。

突出した特技もなく、いつの間にか死んで転生して、目覚めたときの記憶の中にあった街を目指していたら人攫いに捕まってここに来た。

ソーマは前世の事を隠して、この世界に生を受けてからのことを洗いざらい話をした。

「そう、ノンシエラ様、厳しいお方なのね……でも、大丈夫よ、貴方の見た目ならすぐに買い手が付くわ。ここにいる間は健康的な食事と適度な運動は保証されてるから死ぬ事は無いの。人によっては生き地獄かも知れないけれどね」

「ここって、一体何なんだ？」

「奴隷調教施設。特に性奴隷を作るところ」

「ソーマの疑問にクリムは簡単に答えた。

「マジかよ……」

クリムの口から気軽に飛び出てくる性奴隷という単語に、ソーマはぎよつとした。

そして、やはりそう言う概念が跋扈している世界だったかと納得してしまった。

灯りに照らされるクリムの顔の気軽さから当たり前の事なのだろうと思えてしまったからだ。

「大丈夫よ、人間性は絶対に壊されないから。質のいい性奴隷を作るためには、ちゃんと段階を踏んで調教をしないとイケないから。そんなに酷い目には合わないわ」

「質のいいって……」

「私は売れ残りだけれど、貴方とちゃんと話を出来ているでしょう？ そう言う事よ」

確かに。クリムとは現状普通に話を出来ている。どこか壊れている様は見受けられない。

「売れ残りだから、新人の世話は私がやっているの。お金を産まない穀潰しは雑用しかする事がないから。施設の説明をするから、歩けるなら付いて来て」

雑談は終わりとばかりに、クリムはあてがわれていたベッドから立ち上がった。

ソーマも釣られて立ち上がる。

ひんやりとした石畳の感触が素足に伝わってくる。かといって、薄着のボロにもかかわらず肌寒さは一切感じない。室温を一定にでも保っているのだろう。

「一応この部屋は私と、貴方の部屋。用を足すなら桶にして終わったら瓶に入れておいて。どうせ私が処

理するから、あんまり恥ずかしいとか考えないで」

クリムが指し示したのは部屋の隅に置いてある、粘土を焼き固めた少し大きめの風呂桶サイズの桶と人が一人でようやくと抱えられる様な大きさの木蓋の乗った瓶だった。

それを示されてソーマは顔を顰める。水洗でもなく汲取りでもない。そんな用の足しかたは今までやったことがない。

生前、現代日本で生活基盤を築いていたソーマに取ってはカルチャーショックもいい所だった。

「音とか、その臭いとか……衛生面どうなってるんだ……」

「音も臭いも、その桶には排除する魔法がかかっているから心配要らないわよ。もし見られるのが嫌なら部屋から出て行くし。でも、人に見られるのをなれていないと変態に買われたとき排泄する姿を見せられないとか出来ないとかになったら、速攻で殺されるわよ」

まあそれにとクリムは言葉付け足す。

「どうせ、調教中に垂れ流しする羽目になるから、そのうち慣れるわ」

排泄の羞恥と、自分の命、どちらが大事ななんて決まっている。

ただ、異性の年上の女性にそういう姿を見られるのは嫌だった。病院に入院するとなっても、トイレだけは自力で済ませたい。

（風呂はまあ、そういう店があるし、あれはあれで良い物だが、トイレ介助はなあ……）

「慣れたくねえ……」

ゲンナリと肩を落として、ソーマは先に行くクリムの背を追った。

「別に女同士だし、気にしなくても」

「多分クリムが、毒され過ぎ……」

「……そうかもね。私もうここに十年以上いるし」

それ以上突っ込む事は出来ない雰囲気で、ソーマは答えを返さずクリムの後を付いていった。